

“がん”は怖い病気？

がんは1981年以来、死因の1位を占め続けている疾患で、生涯罹患率（生涯でがん罹患する確率）も約50%と、二人に1人はかかる病気です。

ある意味、“非常に身近な病気“になっているのですが、詳しく知ろうとする人は意外に多くありません。

これには“がん” → “怖い病気（死やつらい治療を連想）” → “怖い事は知りたくない” という心理が大きく関わっているのではないのでしょうか？

死因の第1位を占め続けている以上は“怖い病気”である事は間違いありませんし、“治療に伴う副作用”は必ずあります。

だからといって過度に恐れる事はありません。確かに死因の1位をキープしてはいますがこれは、相対的なもの（他の病気で死ななくなり、平均年齢が延びてがんになる機会が増えた。など）であり、決してがんの治療が進歩していない訳ではなく、むしろこの10数年の治療法の進歩は目覚ましいものがあります。

初めて死因の第1位となった1980年代ではがんを診断する手段も少なく早期で発見できる可能性は低く、ある程度病気が進行してしまうと治療の手段も乏しく、まさしく“不治の病”の印象が強かったのは事実です。当時は強い副作用を伴う治療法しか手段がなく、副作用の対応に関しても各施設、各医師が独自の知識、経験でおこなっており（現在からみれば）対策が充分とは言えず、治療はとてつらいものでした。

この20数年の間に医療は飛躍的に進歩しました。診断、治療機器の高精度化、情報伝達技術の発展による全世界レベルでの治療情報の共有・標準化、新薬開発速度の加速と、現在進行形でがん医療は進歩しています。

がん治療のコンセプトも昔は“がんを根治する”が主眼とされてきましたが、いまは“根治できるものはできるだけ（副作用などで）患者さんに負担のかからないように治療し、根治できないものでも残された患者さんの人生が、より長く有意義に過ごせるような治療法を選択しがんと共に共存する”事へと変わってきています。

医療側として困ってしまうのが“検査でがんが見つかる”と怖いから検診は受けない、“（検診などで）がんを診断されたけれど、治療が怖いしもう年だから病院には行かない”といった考えです。

現在でも全てのがんを副作用なく根治できるわけではありませんが、多くのがん種では早期に発見されればされるほど少ない負担で治せる確率も上がっていきますし、放置しておけば必ず進行してしまいます。

確かにがんは“怖い”病気ですが、“見つからずに放っておかれると怖い”病気です。
“怖いから行かない”のではなく“怖い状態にならない”ために市町村で行われている健康診
断は積極的に受診し、もし”要精査“となっても怖がらずに病院を受診してください。



【放射線科診療部長 村松 博之】

